

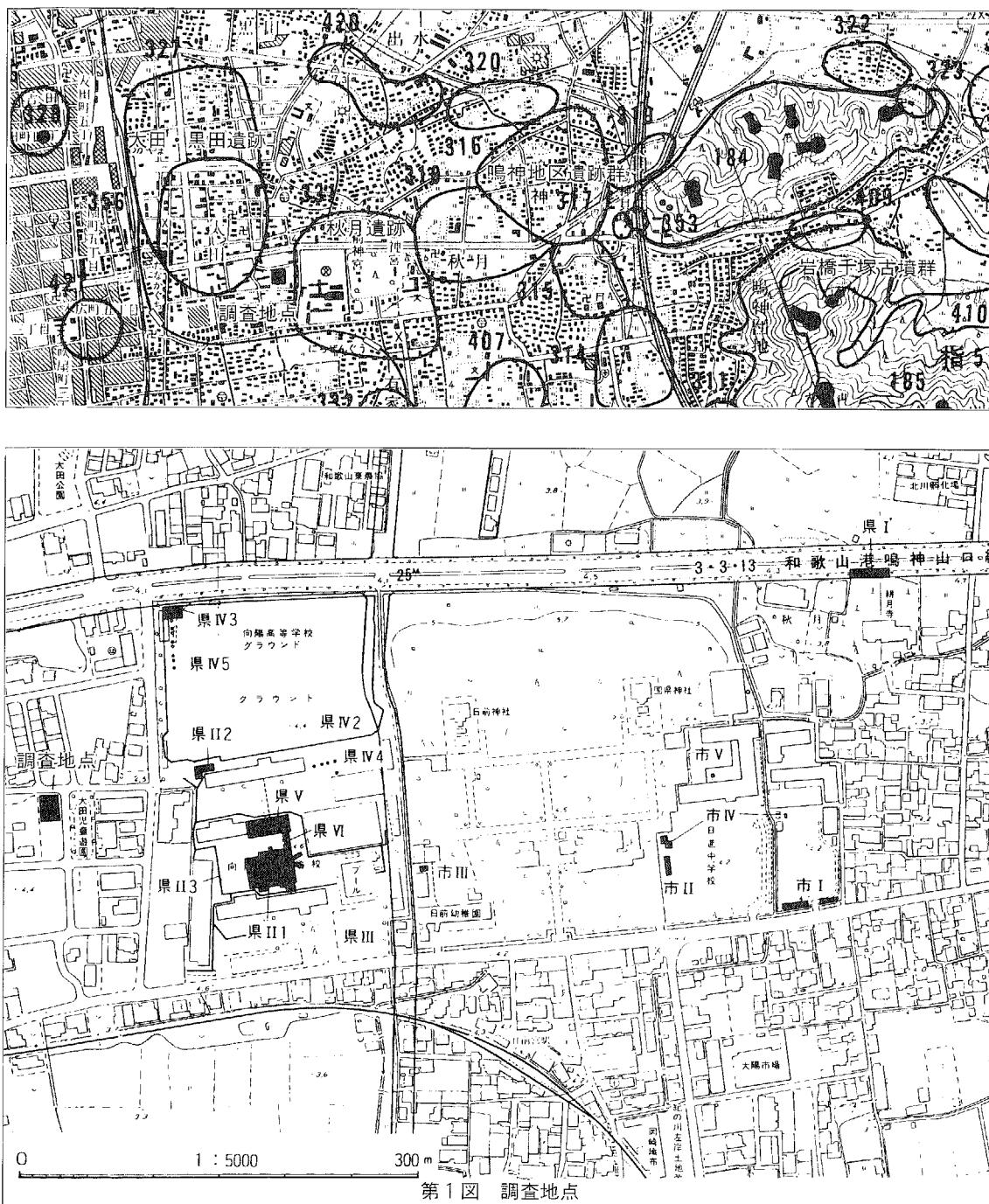
和歌山市所在

秋月遺跡発掘調査概報



(財) 和歌山県文化財センター

1997年10月



はじめに

本書は和歌山市太田に所在する秋月遺跡の発掘調査概報である。調査は和歌山県警太田交番建設に先立つもので、警察本部から事業委託を受けた財団法人和歌山県文化財センターが県教育委員会の指導の下に発掘調査を実施した。調査・本書の作成は武内 雅人が担当した。

調査の地区割りは国土座標第VI系の基準線を利用した4mの方眼で、標高はT.P.+の値である。

遺跡 第1図

秋月遺跡は紀ノ川左岸の微高地上に立地する遺跡で、遺跡の中には紀氏が祭祀を主宰する日^{ひの}前・國懸神社が鎮座している。この遺跡の周辺には太田・黒田遺跡や鳴神地区遺跡群があり、岩橋千塚古墳群とは指呼の位置にある。付近一帯は和歌山市で最も遺跡が集中するところである。

秋月遺跡の発掘調査は今までに何回かおこなわれており、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が多数見つかっている。なかでも、和歌山県立向陽高校の校舎改築工事に伴う発掘調査で、和歌山最古の前方後円墳といわれる秋月古墳が見つかり、この遺跡の重要性が認識されることになった。

今回の調査地点は周知の秋月遺跡に隣接した位置にあるため、平成8年度に和歌山県教育委員会が試掘調査を実施して、遺構・遺物の確認をおこなった。その結果、多数の遺構が発見されたため、関係各機関が協議をおこない今回の発掘調査が実施されることになった。

遺構 第2・3図

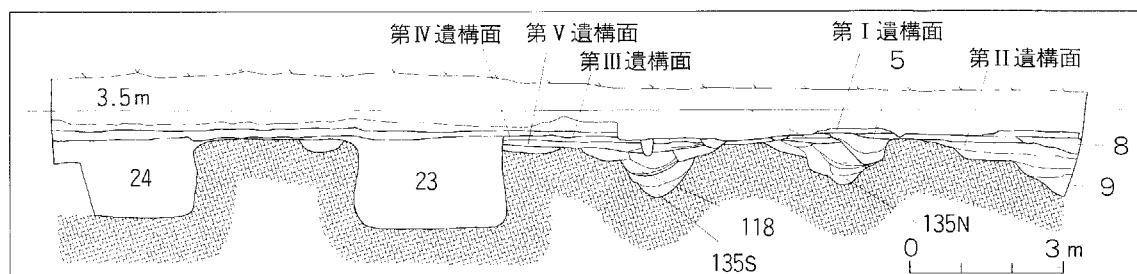
凡そ1mの厚さのある現代の整地層や水田耕作層を取り除くと、近世以前の堆積層に到達する。この層より下層では部分的に遺存しているものを含めると、合計五面の遺構面が確認された。発見された遺構の数は多く、ほぼ全面に遺構が存在するような状況であった。

以下、調査で判明したあらましを記述する。

A. 第I遺構面

近世の水田耕作面である。調査区のほぼ全域に砂泥質の耕作層が遺存しており、その下部の鉄分沈着層で鋤溝や畔畦を確認した。この耕作層には18世紀後半の陶磁器類が相当数包含されており、このあたりが水田化されたのは18世紀後半以降のことと見られる。

鋤溝・畔畦の方向は、およそN-5度-Wおよびその直交方向である。この方向で掘削された溝は調査地の範囲では古墳時代前期までさかのばる。このあたりでは国土座標軸と真北の差は30分以内なので、復元されている日前宮条理区の地割り方向N-10度-W、と調査地内の鋤溝・畔畦の方向は一致していない。



第2図 秋月遺跡の層位関係

B. 第II遺構面

第IV a 層の上面が遺構面である。この層は溝9の埋土上部を構成するほか、溝5埋没後に堆積していることが確認できるが、調査地の北側の一部に遺存しているにすぎない。この面で見つかった遺構は溝8だけである。第IV b 層には15世紀後半の遺物が含まれているので、この面の遺構の年代は15世紀後半から18世紀前半ということになる。

C. 第III・IV遺構面

原理では第IV b 層の上面で見つかった遺構は第III遺構面に、第V層の上面で見つかった遺構は第IV遺構面にそれぞれ属する。前者の遺構としては、堀状遺構23・土壙24~26・溝9・5と土器群12があり、後者にはピット群がある。

しかしながら、後者の遺構面で見つかった全てのピット状遺構の埋土は第IV b 層と近似しており、第IV b 層中に包含された遺物は溝5・土器群12と同じ形式の土器であった。したがって、第IV b 層は短期間の内に堆積した地層とみられる。そして、第IV遺構面で検出したピット状遺構は、実のところは第III遺構面に属するか、発掘中は認識できなかった第IV b 層中の遺構面に属する公算が大と思われる。

実際にピット状遺構のなかには断面観察の結果、第IV b 層上面から掘削されたことが確認できるものもあり、出土遺物にあたらしい形式のものを含む例もあった。

このような理由から、ピット群については第III・IV遺構面への帰属を厳密に分離することはできなくなっている。一方、第III遺構面で見つかった遺構は二時期に大別できるので、新しい時期に属するものを第III新遺構面として扱うこととする。

第III遺構面の年代は、第IV a ・ IV b の出土遺物から判断して13世紀前後から15世紀前半とみられる。

第III新遺構面

溝9

調査地の北端で見つかった東西方向にのびる溝。かなりの部分が調査地外にあるため全体の形状は不明だが、溝の横断形は二段の「U」字状をしている。段のみられる部分を境にして上部と下部では埋土の質が大きく異なっている。

下部の埋土は青灰色系の粘土質を基調とする水成のもので、この遺構には水が流れたり、濁りだりした時期があることを示している。上部の埋土は第IV a 層と同質である。

下部の埋土からは15世紀前半代の瓦器の羽釜・火鉢、備前焼の摺鉢・甕、土師器の皿・甕が出土した。これらの遺物については別途ふれる。

堀状遺構23と土壙24 PL-1

大規模な堀状遺構23は、I-25区では土器群12の上から掘削されている。調査地の西端で幅の

狭くなる部分がつくられている。一時に埋め戻されており、この埋土は堀状遺構23の南側一帯を覆い、土壙24をも埋めている。したがって、土壙24も堀状遺構23と同時期の遺構とみなすことができる。

双方の遺構から出土した遺物の組成や年代に相違があるのは、それぞれの遺構を埋め戻した土中に包含されていた遺物の違いが反映されているのであろう。埋め戻されたのは15世紀前半からそれほど降らない時期とみられる。この二つの遺構から出土した土器については別途取り上げる。

第III遺構面

溝5と土器群12 PL-2・3・6

溝5は幅約1m、深さ約0.5mの小規模なものであるが、瓦器椀や土師器の皿を多数出土した。非常に良好な一括資料なので、この遺構の出土土器については別途取り上げる。

土器群12は、その位置関係や土器の特徴や組成からみて、溝5と関連したものか、溝5と相続いで行われた土器投棄を必要とする儀式の遺構であろう。

第IV遺構面

先にふれた事情でこの面に属する遺構は特定できないが、この遺構面は第IVb・V層出土遺物から判断して8世紀から13世紀にかけての面とみられる。

D. 第V遺構面

無遺物層上の遺構面。弥生時代中期から8世紀にかけての遺構が見つかった。

溝・土壙 PL-4・5・6

弥生時代中期の遺構としては、畿内第III様式に属する土壙117・溝146と第IV様式の溝147・135Nがある。溝135Sは時期判定の遺物を欠くが、135Nより古い遺構であることは重複関係から判明している。第4図(2~7)は、これらの弥生時代中期の遺構からみつかった土器である。

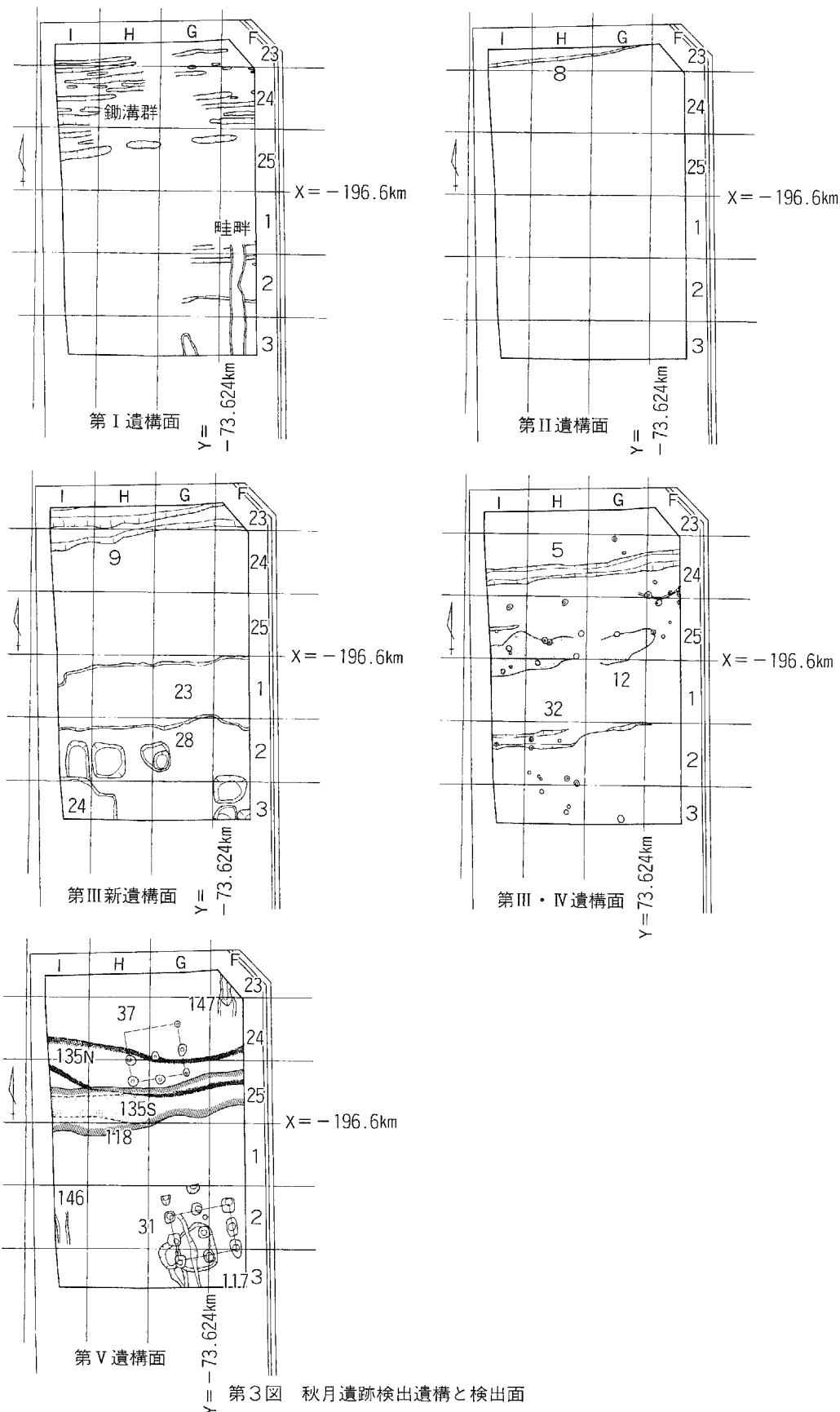
溝118は埋土中から布留式の甕(1)が出土しているので、古墳時代前期の遺構とみられる。

掘立柱建物

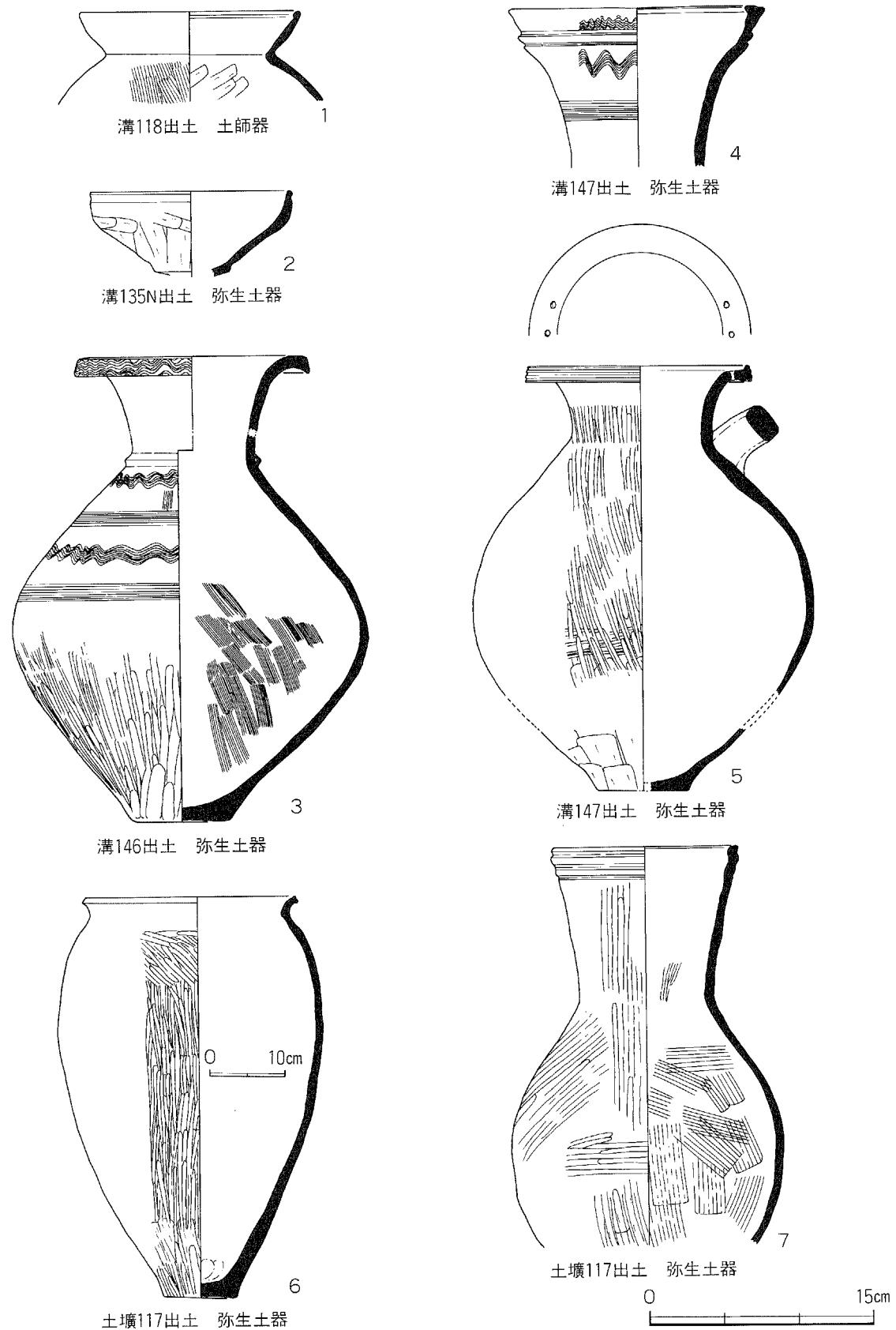
掘立柱建物は二棟みつかった。いずれも二間・二間の東西棟の総柱建物で、棟方向は両方ともN-78度-Eである。

平面規模は、建物37は南北3.2m・東西3.6mで、建物31は南北3m・東西3.8~4mである。少し差があるようにみえるが、面積は両方とも約11.5m²で同じである。

このように、二つの建物は構造・棟方向・平面規模が同じであり、同時代に計画的につくられたとみられる。時期を特定する遺物に乏しいが、柱間に完数尺を使用した公算が強いことと、この遺構を覆う第V層に包含される下限の遺物が8世紀のものであることからみると、7世紀後半から8世紀にかけてのものといえる。31の北側にピット状の遺構が二基遺存しており、同規模の倉がもう一棟あった可能性があろう。



第3図 秋月遺跡検出遺構と検出面



第4図 古墳時代前期・弥生時代中期の土器

出土遺物

溝5出土土器 第5図 PL-6

この溝の埋土から完形の土器が多数出土した。土器は溝の底面から上部にかけて万遍なく出土しており、正立したものや裏がえったものの他、斜めや直立した状態で見つかったものも多い。このような出土状況から判断すると、これらの土器は短期間のうちに間断なく投棄されたものとみられる。数量の多さや遺存状態のよさを勘案すると、これらの土器群は特定地域の基準資料として扱うに足るものであろう。

なお、現地で収集した椀皿類の平面位置と立体的位置のデーターは、第5図・第1表に示しておいた。第5図の資料は口径・器高の判明したものに限っており、第1表は個体識別ができる位置関係のわかるものを取り上げている。従って両方の合計は一致しない。

遺物の時期

出土した瓦器椀には、外面のヘラ磨きが省略されたものと、口縁上部の狭い範囲を疎に磨いたものが混在している。内面の暗文には斜格子・連結輪状・ジグザグ状がある。口縁部内面のヘラ磨きは細くて密である。これらの状況と器形から見ると、出土した瓦器椀は、尾上編年III-1期に平行するものと判断できる。

伴出している須恵器鉢や土釜の年代観も、これと矛盾するものではない。実年代でいうと、凡そ13世紀前後の遺物と見られる。

土器の組成

出土した土器には、瓦器椀(8)・皿(9)のほか、土釜(12)・須恵器鉢・中国製陶磁器がごく少数あるが、土師器皿が絶対的多数を占める。土師器皿には大小の二種類(10・11)がある。

現状で把握できているだけで、それぞれの個体数は、瓦器椀24・瓦器皿1・土師器大皿123・土師器小皿177である。このうち灯明皿に使われた土師器小皿は11個体あり、土師器大皿は3個体ある。接合作業が進展すれば、それぞれの個体数は増加するであろうが、土器組成の基本的な比率には影響するものではないであろう。そうすると、食器類に限っていって、その90%以上を土師器の大小の皿が占め、大小の比率はおよそ1:1.4となる。瓦器椀と、その数倍以上の小皿で構成される同時代の一般的な器種構成とは相当違っている。

近畿地方の当該時期の一般的な食器類の組成としては、瓦器の椀・皿のセットが主で、少数の陶磁器や土師器がそれを補完するのが一般的である。本例のような土師器の皿の大小のセットが主になるのは特異な例であろう。

ロクロ土師器

出土した土師器皿には、例外なく底部に回転糸切り痕と板目状圧痕がみられる。土師器皿はロ

クロで製作されたことがわかる。判明する限りではロクロの回転方向は、すべて上方から見て時計周りである。

これらの皿は、色調から見ると5YR6/6橙色と2.5Y8/2灰白色の二種に分類できるが、いずれも胎土中にクサリ疊・結晶片岩片を含んでおり、紀ノ川南岸産ともくされる。

食器類の寸法

第5図に出土した食器類の口径・器高を図示した。使用した計測値は50%以上遺存した個体のものである。瓦器椀・皿と土師器の大小の皿は、口径が15および9cmほどの規格で生産されたことがわかる。土師器の大小の皿の規格性はとりわけ高水準である。

県内の出土事例

和歌山県内でのロクロ成形の土師器の出土事例は、有田川以北では間々見られ、然程珍しいものではない。他の事例も12世紀末から13世紀代のもので、同じような時期のものとみることができる。

土器の組成については、具体的な数量が明らかになった例が他にないのではっきりしないが、組成の絶対多数をロクロ土師器が占める例は他の遺跡では今のところ確認できない。

堀状遺構23と土壙24出土土器 第6図

この二つの遺構は第III新遺構面に属し、相互に関連した同時期の遺構と目される。一挙に埋められた埋土中から、それぞれ相当数の土器類が出土している。これらの遺物は埋め戻しに使われた土中に含まれているもので、周辺に所在した遺構や遺物包含層の遺物が混在している。したがって、複数時期に属する遺物がそれなりの数量出土しており、これらの遺物が堀状遺構の掘削や埋立の時期を直接反映しているわけではない。

このように出土状況からみると、とうてい一級資料とは言えないが、堀状遺構23のF-1区から出土した遺物と土壙24出土遺物には、編年資料として扱うに足る形式的まとまりが認められる。それはおそらく、周辺に良好な一括遺物を包含する遺構が所在しており、その遺構を破壊した上で堀状遺構の一角や土壙24が埋め戻されたからであろう。

以下にその考えを提示する。仮説は別角度や他の事例で検証すればよいであろう。

堀状遺構23、F-1区出土遺物 第6図 (13~19)

ここから出土した瓦器椀の90%以上は、高台の矮小化が著しい形式のもので、尾上編年IV-1・2の時期に該当する。したがって、底部に糸切り痕のある古形式のものを除外すれば、一緒に出土した土師器皿も瓦器椀と同じ時期のものとみることができる。実年代では14世紀初のものであろうか。

瓦器椀(13~15)の高台は、細い粘土紐を直徑3.5から4cmの大きさに貼り付けたもので、貼り付け後の調整を省略しており、高台が全周しないものもある。器面の遺存状態は良くないが、確

認できる限りでは、内面の暗文とヘラミガキは連続した圈線状のものとなっており、外面のヘラミガキは施されていない。粘土紐の接合痕が水平位置で観察できるものが多い。

瓦器碗の法量も縮小傾向が著しく、口径は約13~14cm、器高約3.5~4.0cmの大きさとなる。瓦器小皿(16・17)は口径約7.5~8.0cm、器高約3.5~4.0cmの大きさである。土師器の皿(18・19)は小皿に限られ、口径が約7.2~9.0cmで器高が1.1~1.4cmの大きさである。個体による口径の差が大きい。土師器皿は、すべて「左手手法」で製作されている。なお、第6図に掲載した土器の法量は、遺存率25%以上の歪みの少ないものを計測した結果である。

土壙24出土土器 第6図 (20~33)

土師器の皿が大多数を占めており、少数の瓦器および青磁や東海系陶器もある。

青磁碗には14世紀以前の連弁文碗や15世紀前後の端反りの碗(31)がみられ、瀬戸の灰釉平碗(32)は15世紀前半のものと目される。

瓦器碗は破片数にして全体の1パーセント程度の少数で、全容を知るようなものもないが、高台の断面形が小さな三角形をしたもので13世紀後半以降のものである公算が大きい。

瓦器火鉢(33)は花菱文が押印されたもので15世紀代前半のものとみられる。

以上の出土遺物の状況からすると、この遺構から出土した土師器皿は、理論的には13世紀後半から15世紀前半代のものが混在している可能性があることになるが、主要な部分は瓦器碗消滅後のものとみることができよう。

土師器皿の法量は第6図に示したが、口径が14cm前後と8cm前後の大小二種の器種がある。皿の底部はすべて不調整で指頭・掌・木葉の圧痕がつき、「左手手法」や「木の葉手法」で製作されたことがわかる。個体による口径の差が大きい。

土師器小皿には、底部に丸みのある(23~25)と、平らな底部で器高の低いもの(26~30)とがある。後者のうち(30)のような口縁部の断面形が三角をしたものと同じ形態の皿は、一時期古い遺構から出土しており、混在した古い遺物とみられる。

土師器皿の胎土や色調の状況は、溝5出土土器と同じである。色調から皿は二群にわけられるが、その他の属性との相関関係はない。

溝9下層(3~5層)出土土器 第6図 (34~41)

土壙24出土土器と同時期とみられるものに溝9下層(4~6層)出土土器がある。これには瓦器釜(41)・瓦器火鉢(40)・備前焼きの摺鉢(39)や甕・土師器の甕(38)など、15世紀前半とみられる遺物が多い。

瓦器火鉢は花菱文のついたもので、土壙24出土のものと寸分違わぬ物である。土師器皿(34~37)は大小の二種類があり、形態や法量の特徴は土壙24出土土器と同じものである。

以上のように、土壙24出土土器を溝9下層出土土器と比較検討してみると、土壙24出土土器に

は少数の古い遺物が内包されているが、その類似性からみて両者はほぼ同時期のものと判断することができよう。

溝9上層(1～3)層・第IVa層出土土器 第6図 (42～44)

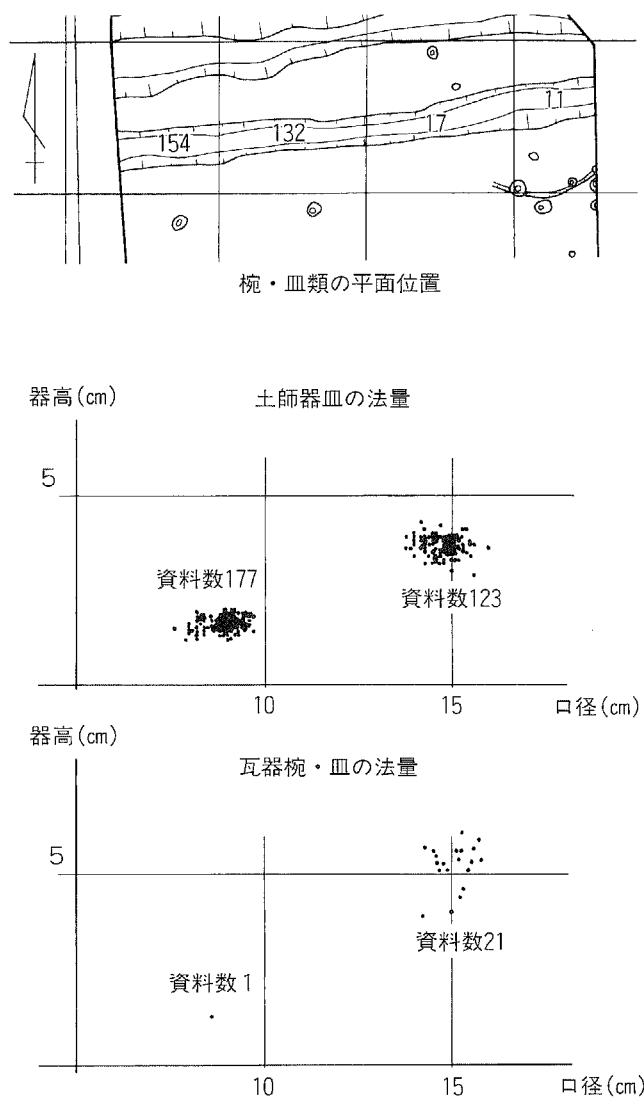
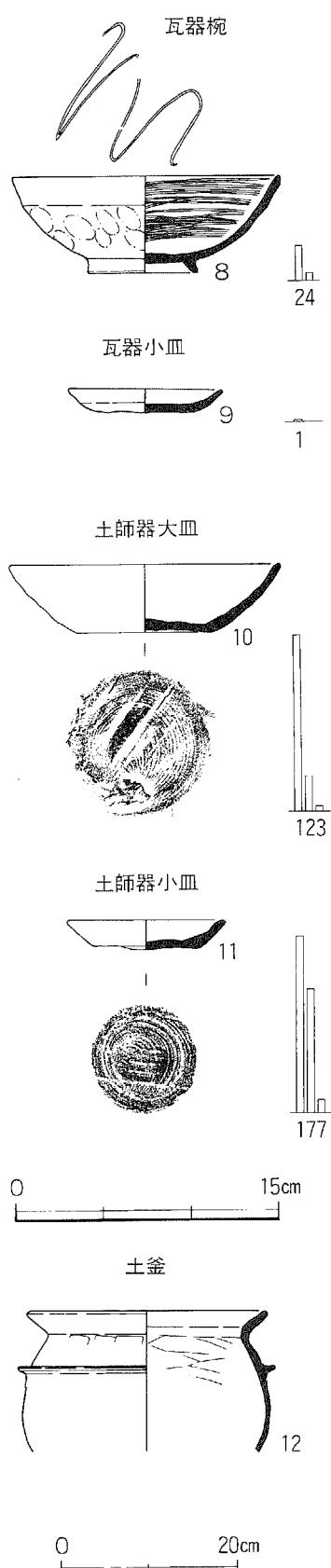
溝9の上部埋土を構成しているのは、基本的には第IVa層と同じ土層であった。出土遺物の構成も殆どおなじものといえる。小破片の土器が多く図示できるものは少ないが、溝9下層・土壙24から出土した土器に続く時期のものと考えられる。

この遺物群には、線割きで連弁を表現した青磁碗(44)や染め付けなどの15世紀後半期とみられる輸入陶磁器があり、編年上の位置を示している。

土師期皿は小皿に限られる。溝9下層・土壙24から出土するタイプのほかに、(42・43)のような口径が9～10cmほどある大振りで口縁端部が丸く肥厚する皿が出現している。このような土師器皿は根来寺の16世紀の資料に多量に見られる。

付表 動物遺体一覧（大阪市立大学医学部 安部 きみ子氏による）

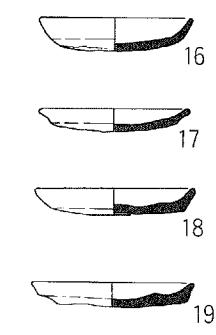
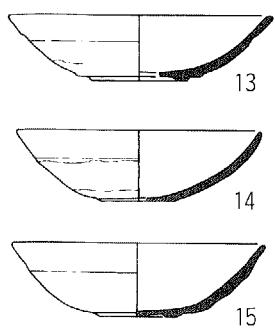
出土地区	遺構	層位	種類	部位	備考
G24	溝5	上層	馬	歯	若駒
H24	溝5	下層	牛?	上腕骨	
G23	溝9	4層	馬	歯	若駒
H2	土壙25		馬	歯	若駒
G24		IVb層	馬	右下顎第三臼歯	若駒



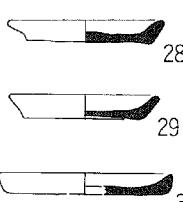
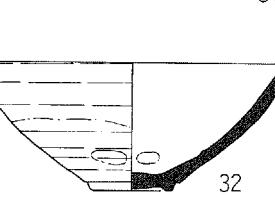
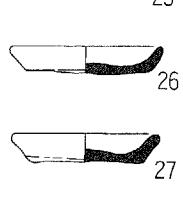
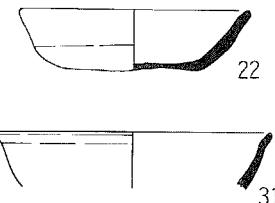
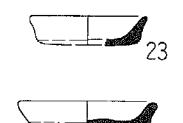
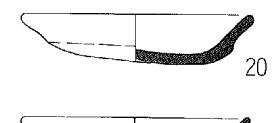
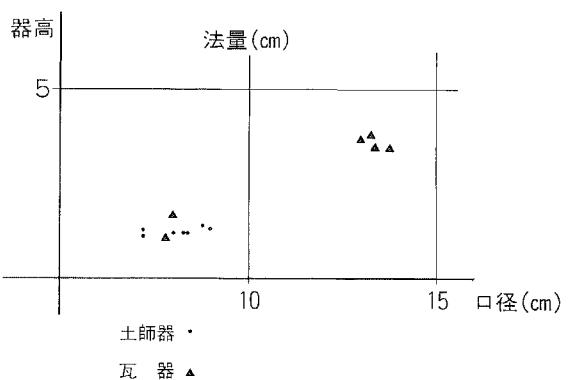
第1表 溝5出土椀皿類の立体的位置

位置／出土地区	F24	G24	H24	I24	計
正立	9	7	42	87	145
裏返し	1	5	23	16	45
表向き斜め	10	7	67	54	138
裏向き斜め	2	0	16	16	34
直立	1	4	14	7	26
計	23	23	162	180	388

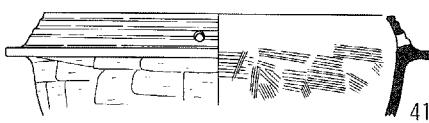
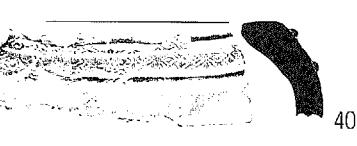
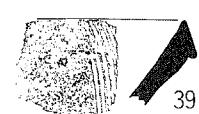
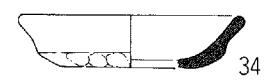
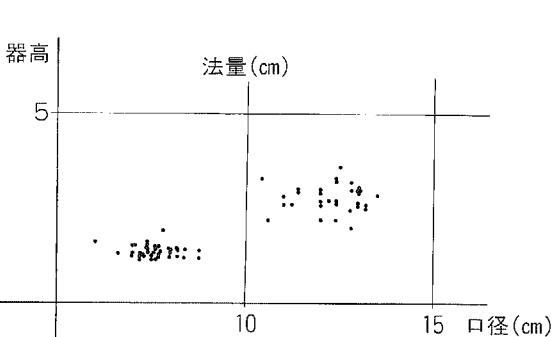
第5図 溝5出土土器と法量および出土状況



堀状遺構23 出土土器



土壤24出土土器



溝9出土土器



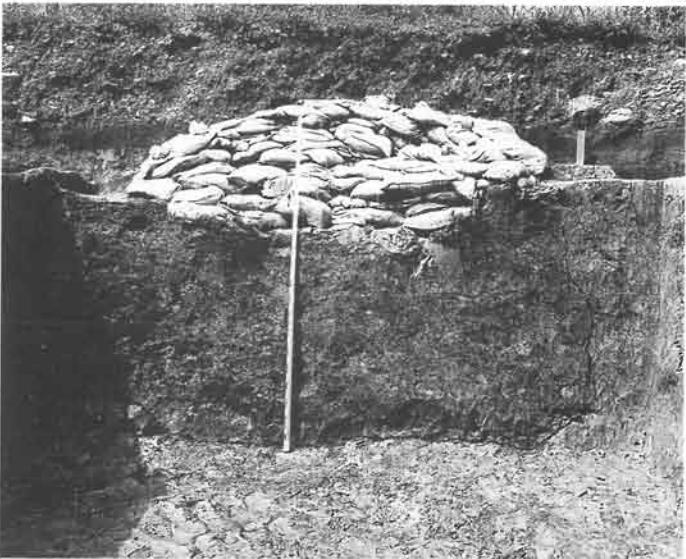
第6図 堀状遺構23・土壤24・溝9出土土器



堀状遺構23(東から)

土置き場のスペースの事情と安全面への配慮から、一番最後に発掘した遺構である。そのため、本当の検出面より一層下で発掘した状態となっている。

幅は約4mで、深さが約1.8mあり、垂直に掘りさげられた「箱掘」である。



同上 土層(東から)

周辺にある地山と暗灰色系の遺物包含層の混合した土が、底から上まで堆積していた。そのため、この遺構は自然に堆積していった土で埋まつたのではなく、一気に埋め戻されたものとみられる。埋められた時代ははっきりしないが、15世紀前半以降であろう。

この壁は撮影後ほどなく崩壊した。



土壙24(南東から)

左に見える深い穴がそうである。この遺構は調査区域外にのびているため、全容はわからないが、約1.8mの深さに垂直に掘り下げられており、堀状遺構23と同様の状況で埋められている。

そのため、この遺構は堀状遺構23と関連した施設とみられる。

PL-2



溝5と土器群12(東から)

溝5と土器群12はおよそ4m離れているが、平行する位置関係にある。土器群12は西のほうでは土器の数が少なくなるが、帯状に続く土器の集合体である。

両方の遺構からまったく同じ土器が多数みつかった。



溝5遺物出土状況(東から)

この溝から完形品の土器が多数みつかった。とくに西側のH・I-24区に多い。13世紀前後の時代につくられた土師器皿が九割り以上を占めるが、瓦器椀などもある。

溝のなかの土は真ん中が窪んだ「U」字状に堆積しており、土器も同じ様に重なっているのがわかる。



同上(南から)

正立、裏、斜め、直立と土器の向きは様々である。

右の方には土釜も見える。

PL-3



溝5遺物出土状況(西から)

G-24区から東側では土器の数は急に少なくなる。



土器群12(南西から)

多数の土器片が集まっている。このあたりが宅地に造成されたときの工事によって、土器は細かな破片に割れているが、本来は全て完形品であった模様である。

13世紀前後の時代につくられた土器であろう。



同上 断面(北から)

上の土器の集合体を分割して解剖した。

土器を取り除くと、そのあとは浅い窪みになる。

PL-4



掘立柱建物37・31(北から)

同じ規模・同じ構造の建物が同じ方向に並んでいる。

7世紀後半か8世紀のものであろう。

掘立柱建物31と土壙 117(南から)

土壙 117 は弥生時代のもので、その上から建物がつくられている。

建物は真ん中に床を支える東柱がある総柱構造で倉とみられる。南北・東西とも柱間が二間で、床面積は凡そ 11.5 m^2 である。

寸法の長い東西が棟の方向であろう。

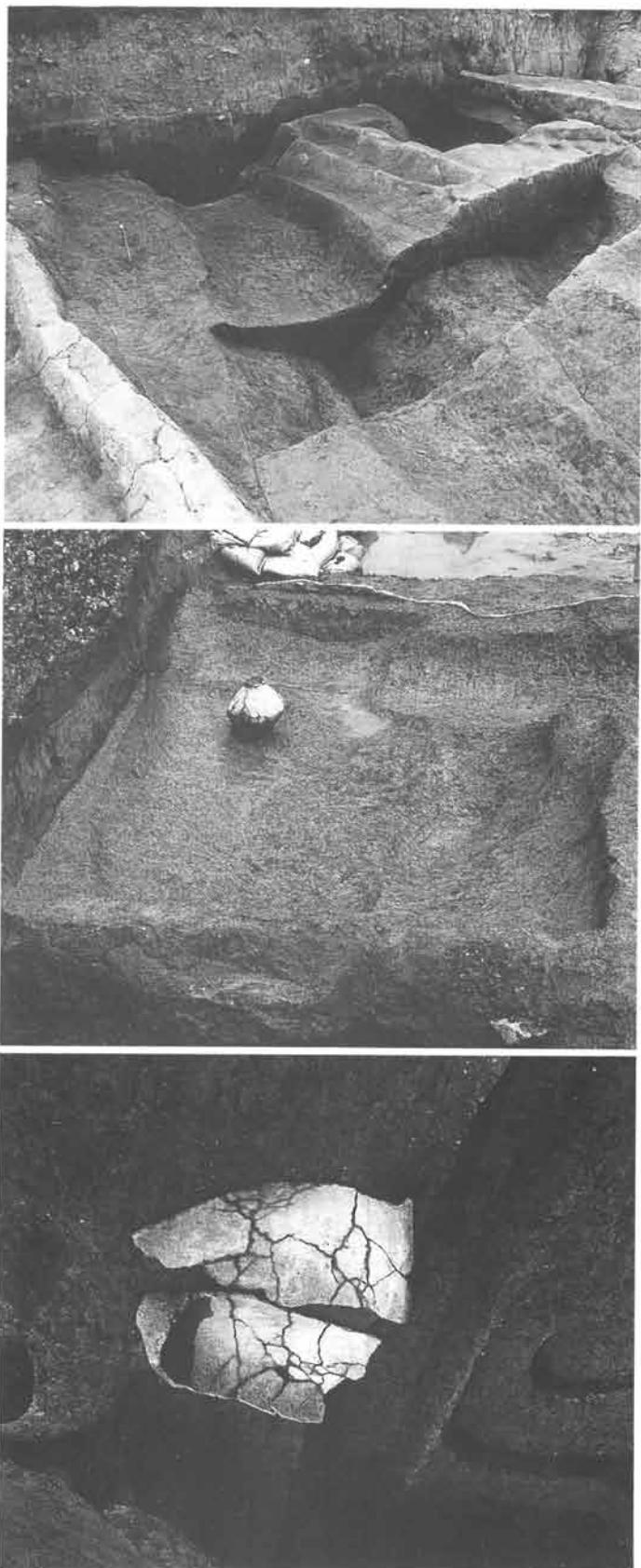
掘立柱建物37と溝 118・135 N・

135 S(東から)

掘立柱建物37の柱穴の一部は溝 5 によって失われている。

白い線で示しているのが 135 N と 135 S の平面形。

溝 118 は古墳時代前期のもので、135 N と 135 S は弥生時代中期のものである。



溝 135 N・135 Sの土層

(南東から)

この二つの溝は写真とは別の場所で重なっており、北側の 135 N のほうが新しい。

両方とも、底のほうには水成の粘土質の土が堆積しており、水が流れたり濁んだりした溝であることがわかる。

溝 146 (南から)

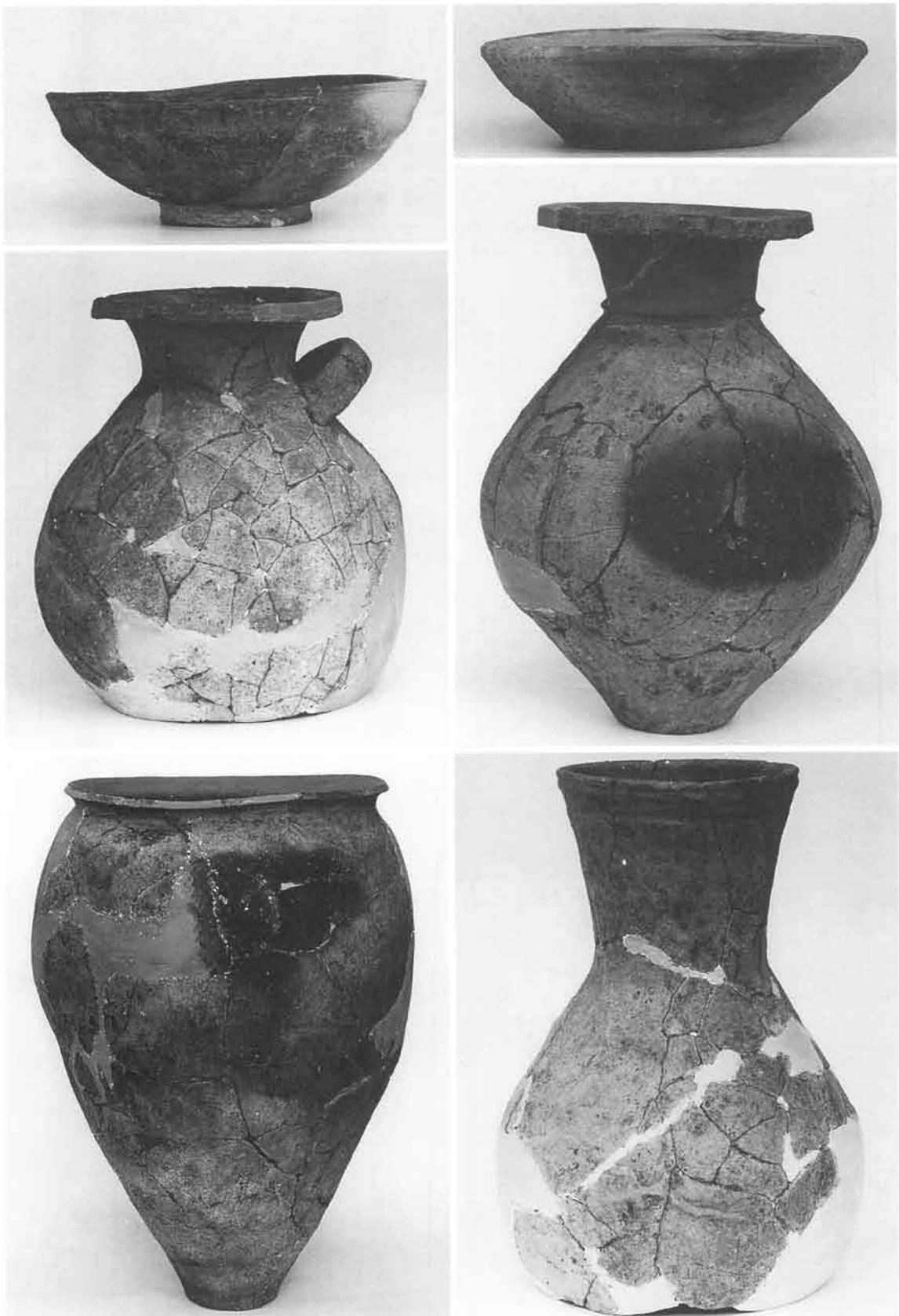
色々な新しい時代の遺構に壊されていて、一部が発掘されただけであるが、溝の底に弥生時代の壺が直立した状態でみつかった。

壺の中には割れた口縁部が落ち込んでいた。

土壤 117 遺物出土状況(西から)

弥生時代の壺が二つに割れた状態で底にくっついてみつかった。

別の場所では壺が同じように底にくっついて出土した。



上 溝5 瓦器椀
中 溝147 弥生土器
下 土壙117 弥生土器

上 溝5 土師器皿
中 溝146 弥生土器
下 土壙117 弥生土器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あきづきいせき はっくつちょうさがいほう							
書 名	秋月遺跡 発掘調査概報							
編著者名	武内 雅人							
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	和歌山市 広道20番地							
発行年月日	1997年10月							
所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あきづきいせき 秋月遺跡	和歌山県 和歌山市 太田	3020150	3 3 1	34度 13分 30秒	135度 12分 3秒	1997年5月23日 ~ 1997年10月31日	300m ²	交番建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
秋月遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 鎌倉時代	溝 掘立柱建物 堀状遺構	弥生土器 土師器 瓦器				

秋月遺跡調査概報

1997年10月

編集 (財) 和歌山県文化財センター
発行

印刷 株式会社和歌山印刷所